



指導主事だより

なんだか うれしい

教育委員会

相談時間等 月・水・金曜日

●立科小学校/午前9時～午前11時30分

電話 0267-56-3131 (呼)

●立科中学校/午後2時～午後5時

電話 0267-56-1076 (呼)

●立科町児童館/

午前 11時50分～午後1時40分

電話 0267-56-0303 (直通)

(担当 指導主事 中島 一彦)

ストケシアの花

「からだ」が自分の内側の世界に向かって開いているときは、「からだ」は様々なことを感じ取ることができます。学校で、大声や感情的な立ち振る舞いで怒鳴られたり、「なんで、そんなことで黙ってしまうのだ」「なぜ、最後まで発言しないんだ」・・・そんな感情(言葉だけではなく、無意識に醸し出す教師の雰囲気)をぶつけられたりし続けてきた子どもたちは・・・自分を守るために無意識の内に「からだ」全体を鎧でおおうようになっていきます。見えない鎧は、外からの刺激を遮断し、表情を押し殺し、感じることを遮断してしまいます。感じるという心をとめてしまうといってもいいのかもしれませんが。

そんな内面に気づかずに、全体と同じ歩調を求め続ける教師。教師の感情で自分が言いたいことが言えなかったり、したいことがどうということか分からなくなったりということでは、その子にとって教師はいなかったということになります

昨日、立科中学校の事務室で待機していた時のことでした。休み時間に校長室で堀内校長先生と談笑する中学生たちの姿がありました。楽しそうな会話が耳に入り、思わず聴き入りました。退室時一人の女生徒が「私、堀内校長先生の孫になりたい」と笑顔で退出していきました。楽し気に授業に向かう後ろ姿を見ながら、思い出したことがあります。

中学1年で出会ったAさん。発達障害を抱え口数が少なく、孤立しがちなAさん。なかなか口を開こうとしません。国語の授業で、Aさんに語ってもらうために様々な工夫や場を整えましたが、言葉を発してくれません。40代でしたので、様々な授業技術を駆使しながらぶつかってみましたが、思うようにいきません。1年後新しい支援員のM先生が学校に来られました。AさんがM先生と出会い、生活を共にしていく中で、M先生と楽しそうに会話をする姿に出会うようになりました。Aさんに関わり続けた先生方からは、時に嫉妬にも似た感情をぶつけられながら、「どうしてM先生ならしゃべるの?」そんな声もきかれるようになりました。M先生はもちろん感情をぶつけるような姿勢はとりません。

Aさんからの「お菓子が好き」という情報をキャッチし、季節に合わせた行事にまつわるヨモギ団子を作り始めます。限られた時間の中で、ヨモギを摘み、粉と混ぜ、あんこを入れ、・・・Aさんの話に耳を傾けながら、M先生はAさんに合うプロジェクトを企画実践されていきました。

子どもが子どもとして受け入れられる、また無条件に、その存在を肯定される、生まれてきたことが祝福され、その存在がとても大切に思われて、そこにいる。そういう居場所があってはじめて子どもが子どもとして存在できる・・・そんなことをM先生との日々の会話から思うようになりました。

家庭訪問の玄関先で「この花、素敵ね」とAさんに声をかけたM先生。Aさんは「先生、それはねストケシアの花だよ」と嬉しそうに教えてくれたそうです。

Aさんが様々な困難を乗り越え、高校生活に踏み出して2か月後、「ストケシア」の小さな苗がM先生に届けられました。

こんな教師や子どもたちとの出会いを思い返しなが、存在を肯定される、生まれてきたことが祝福され、その存在がとても大切に思われて、そこにいることができる・・・子どもたちが、そう感じる「教師のからだ」を考え続けていきたいと思います。

